



み国が来ますように
祈りのしおり

2025 年 5 月 29 日～6 月 8 日



日本聖公会

あなたの霊によって私たちを 新たにしてください



『Thy Kingdom Come（み国が来ますように）』は、昇天日から聖霊降臨日にかけて行なわれる世界的な祈りの運動で、10周年を迎えます。2016年にカンタベリー大主教とヨーク大主教の呼びかけではじまって以来、172カ国、85教派以上のキリスト者が、友人や家族がイエスさまを信じるようになるよう祈ってきました。『み国が来ますように』と祈るすべての人々が、イエスさまとの交わりを深め、イエスさまの証人となるための自信を新たにし、他の人をイエスさまのもとに導くことを目的としています。

イエスさまは昇天される前に、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる。」（使徒言行録1：8）と約束され、弟子たちは、「心を合わせて、ひたすら祈りをしてい」ました（同1：14）。このことをお手本にして、私たちもこの期間に祈りに励みましょう。

お祈りの期間は昇天日（5月29日）から聖霊降臨日（6月8日）までの11日間です。具体的には、イエスさまの愛と平和を知ってほしい友人や家族・知人5名を選び、しおりに名前を記して、その人たちのために11日間祈っていきます。

日本聖公会は、この運動に2020年から参加してきました。今年の各日のテーマ（昇天日、愛するなど）は、2024年の英語版から引用し、聖書の箇所やみ言葉の解説、祈りなどは各教区主教と管区事務所総主事が担当して作成しました。

昇天日から聖霊降臨日の間の、希望に満ちた待望と祈りの日々の中で、私たちがみな、聖霊によって新たにされ、キリストにあって新たにされますように。

日本聖公会主教会



Thy Kingdom come のウェブページ
日本語のページも用意されています。
祈りの登録や各種資料も準備されています。
<https://www.thykingdomcome.global/>

祈りのしおりは、いつでもどこでも用いていただけますが、例えば 1 日のはじめの朝に、朝食後や仕事を始める前に、教会から少し離れている人やイエスさまのところに導きたい人を 5 人（3 人でも 10 人でも自由に）覚えてください。グループで共通の 1 人を覚えてもよいと思います。

同じ時間にウェブでつながって用いることもできますし、後日に繰り返し用いることも可能で、いつでもどこでも自由に祈りの手引きとして用いてください。

手順の例としては、①「み国が来ますように」の祈りを唱え、② み言葉を味わい（前後の箇所を含めて読み、思い巡らせるなど）、③ 各メッセージを味わい（グループなら感想を述べあうなど）、④ 祈りをゆっくりと心を込めて唱え、⑤ 5 人のことを覚えて祈り（一人ひとりのことを覚えるなど自由に）、⑥ 主の祈りと祝祷で終わる、といった具合に用いることができますし、自由にいつでもどこでも用いてください。

以下に、あなたがこの期間中、祈りに覚えたい人たちの名前を書いてください。そして、神さまがそれらの人々の人生や生活を変えてくださるように祈りましょう。

私が覚える 5 人は…

1.

2.

3.

4.

5.

The Prayer for Thy Kingdom Come

「み国が来ますように」の祈り

全能の神よ、あなたは天に昇ったあなたのみ子によって、み国の福音を宣べ伝えるようにと、私たちをこの世に送り出されました。どうかあなたの霊によって私たちにひらめきを与え、私たちの心にあなたの愛を灯してください。そして、あなたの言葉を聞くすべての人が、あなたのもとに集えますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン



み言葉

見よ、人の子のような者が

天の雲に乗って来て

日の老いたる者のところに着き

その前に導かれた。

この方に支配権、栄誉、王権が与えられ

諸民族、諸国民、諸言語の者たちすべては

この方に仕える。

その支配は永遠の支配で、過ぎ去ることがなく

その統治は滅びることがない。（ダニエル書 7:13b～14）

冒頭の聖句はダニエルが見た幻の様子ですが、イエスさまが天に昇られた時の様子が語られているように思えます。イエスさまは人の子としてお生まれになり、神さまの福音を言葉と行ないによって示され、十字架によって私たちの罪を贖なわれ、復活して天に昇られました。天に昇られた後には、聖霊降臨によって、すべての人に福音を宣べ伝える使命が弟子たちに与えられました。

永遠である神さま（日の老いたる者）、救い主であるイエスさま（人の子）、そして聖霊の働きという、三位一体の神さまのみ国が来ますようにと祈り・仕えることが、教会の働きであることを覚えます。

聖霊によって身ごもった人の子？人の罪を贖う？復活？昇天？聖霊の働き？どれもこれもイエスさまを信じない人にとっては理解しがたいこと、損な生き方だと思われることばかりかも知れません。でも、死がいのちに、敗北が勝利に、闇に光が灯されることを私たちは知っています。イエスさまの弟子であることは、困難や恐れを伴うけれども、必ず喜びが与えられることを信じているということです。

すべてのいのちが神さまから与えられた、かけがえのない大切なものであることを、世界中の人々と共有し、誰もが安全で安心できる共同体として歩みたいと願っています。イエスさまの愛の生き様をお手本にして、目には見えなくても、いつも私たちと共にいると約束してくださっていることを信じ、いのちに仕える道を尋ね求めたいと思います。

祈 り

慈しみと愛の神さま、人の子としてイエスさまをこの世に遣わし、私たちをその弟子としてくださることを感謝いたします。

あなたの与えられたかけがえのない いのちをないがしろにしている私たちをおゆるしてください。

イエスさまの愛を受け継ぐ平和の器として、聖霊の働きによって私たちを強め、あなたの福音を一人でも多くの人たちと分かち合うために遣わし、用いてください。

主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

み言葉

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため
である。
(ヨハネ 3:16)

聖書はもちろんのことですが、世の中、至るところで「愛」という言葉が使われ、氾濫しているとさえ言えます。中には、心を重くさせられる意味合いで使われているもの、あるいは自らの心や生き方を狭めたり、雁字搦めにしたりするような意味が込められているものも皆無ではありません。

16 世紀、日本にイエス様の福音を携え遙々海を渡って来た宣教師たちは、「神様の愛」を「ゼウスのご大切」と伝えたという有名な話が語り継がれています。印象、感想は個々あるでしょうが、「愛」という言葉もさることながら、「大切にされている」「大切にさせていただいている」という言葉には、得も言われぬ温かさ、安心を感じます。

しかも、それをひと時の気分や感情ではなしに、愛すること、大切になさることに疲れることなく、ご自身の喜びとさえしてくださる神さまに感謝を捧げ続けるとともに、その神さまの心を遠慮や躊躇うことなくいただき、そのみ心に与り続けたいものです。

祈 り

私たちに尊い賜物としてのいのちを授け、日々育んでくださる神さま、私たちはその愛を余すところなく注いでいただき、その愛によって生かされ、信仰を、靈性を育むことができます。

また、その愛に与り、あなたのみ心に適うキリストの弟子として自らを整え、主に仕えることを感謝し、喜びとしていくことができますように。そして、その愛によって、更にあなたと人びとを愛することができる者へと日々成長させてください。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。 アーメン



み言葉

主が来られ、そばに立って、これまでと同じように呼ばれた。「サムエル、サムエル。」サムエルは答えた。「お話しください。僕は聞いております。」（サムエル記上 3：10）

私たちが神の御前に立とうとするとき、私たちにまず必要なのは、聞く、すなわち神の御言葉に耳を傾け、心を傾けていくということではないかと思うのです。そのためには、サムエルが答えているように神に応答しなければなりません。

「お話しください。僕は聞いております。」と。

心と耳を傾けて聞こうとするとき、私たちは自らが語ることを止めなければなりません。語ることを止めて口を閉じる、ということです。

神の御前で祈るということは、私たちが神への感謝や賛美、そして懺悔をもって自らの罪の赦しを求め、隣人のために代祷をささげることが含まれます。しかし、自らが語り始める前に、まず神の御声を聴く姿勢を持つことが求められます。

たとえば、主日礼拝のために聖堂に入って席に着いたなら、まずはしばし沈黙のときを持って、神の御声に耳を傾け、神が話してくださることを待つということです。

旧約聖書のハバクク書の 2 章 20 節には、次のように記されています。

「しかし、主はその聖なる神殿におられる。

全地よ、主の御前に沈黙せよ。」

私たちは、口を開く、つまり自らが神に語りかけ始める前に、まず沈黙し、御声に耳と心を傾けて聞き、神が語られたことを踏まえ、それに基づいて私たちが神に向かって声を上げていくとき、それは、神が求められ、また望まれる私たちの応答となって、主イエス・キリストの御名によってささげられていくものとなってゆくのだと思います。

祈 り

主イエス・キリストの父なる神さま、あなたは私たちに御子の名によって祈ることを教えられました。私たちの祈りがつねに御心に適い、あなたの御栄えを現すものとなりますように、まずあなたが語られる御声に聴く思いを私たちの内に備えてください。あなたの御声に心を傾け耳を傾けて聞くことにより、私たちの祈りが清められ、御子が祈られたように、私たちが御旨に適うことをつねに願い求めて歩むことができるようにしてください。十字架の死に至るまで父の御旨に従順に歩まれた御子イエス・キリストの御名によってお願いいたします。 アーメン

み言葉

神は言われた。「地は草木を生えさせよ。種をつける草と、種のある実を結ぶ果樹を、それぞれの種類に従って地上に生えさせよ。」そのようになった。地は草木を生じさせ、種をつける草をそれぞれの種類に従って、種のある実をつける木をそれぞれの種類に従って生じさせた。神は見て良しとされた。(創世記 1 : 11～12)

1990 年 2 月、韓国ソウルにおいて、世界のキリスト教史上、画期的な世界会議が開催されました。それは、世界教会協議会(WCC)が中心となって招請した、「正義・平和・創造の保全世界会議」(JPIC)です。この会議では、<いのち>が人間の生命のみならず、「神によって創造されたすべての<いのち>」であると、明確に宣言されました。それまでのキリスト教神学や宣教論は、あくまでも人間中心的なものでした。「正義と平和」というテーマは、世界の教会の一貫したテーマであり続けてきましたが、被造物への関心が語られることはなかったのです。

JPIC 会議は、「世界教会の頌栄」を採択しました。そこには三位一体の神を讃えるこのような祈りがあります。

「私たちは被造物の管理人であることを肝に命じ、あなたがお造りになったものすべてと共に、あなたの栄光を祝い、あなたへの賛美を歌う。

神に栄光あれ、初めにすべてのものをお造りになり、それを良しとされた方に。

御子イエスに栄光あれ、新しき創造の初穂であり、すべてのものの贖い主に。

聖霊に栄光あれ、初めに水の面を覆われた方に、すべて<いのち>あるものを、あなたの愛で、満たされる方に」

この<いのちの神学>の基調は、すべての<いのち>や<いのち>を可能ならしめるものに対しては「然り」を宣言し、すべての<死>や<死>をもたらす諸力には徹底した<否>を告げることにあります。

あるカンタベリー大主教は、かつてこう語られました。死を克服する復活の<いのち>、食事を分かち合うことによる<いのち>によって、私たちは生かされていることを、そして、その<いのち>こそが、「私」と、すべて生きとし生けるものである「他者」を結びつけていることを思い起こすように、と。

祈　り

「神よ、造られたすべてのものによって、わたしはあなたを賛美します。

わたしたちの兄弟、太陽によってあなたを賛美します。

太陽は光りをもってわたしたちを照らし、その輝きはあなたの姿を現します。

わたしたちの姉妹、月と星によってあなたを賛美します。

月と星はあなたのけだかさを受けています。

わたしたちの兄弟、風によってあなたを賛美します。

風は<いのち>あるものを支えます」

「神よ、あなたの愛のために許し合い、
病と苦しみを耐え忍ぶ者によって、わたしはあなたを賛美
します。

終わりまで安らかに耐え抜く者は、あなたから永遠の冠を
受けます。

神よ、造られたすべてのものによって、わたしは深く
へりくだってあなたを賛美し、
感謝します」

(アシジのフランシス『太陽の賛歌』から)

み言葉

正しき者の行く末は輝き出る光のようだ。

進むほどに光を増し、真昼の輝きとなる。（箴言 4：18）

私たちは皆、この方の満ち溢れる豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを与えられた。（ヨハネ 1：16）

幼稚園での運動会、走るのが苦手な子は先生が手を引いたり、抱っこして走ります。私が幼稚園の子どもの時、なぜ走るのか分からなくて、ゴールに向かって歩いたのを今も覚えています。その後は、運動会では競走があり、勉強などでも競争があり、いやでも少しは頑張るということは分かってきました。自分自身が走らないと前に進めないということも分かってきました。

「あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々があなた方の立派な行いを見て、天におられるあなた方の父を崇めるようになるためである。（マタイ 5：16）」このこともすごく分かるようになってきました。初めに挙げた5人の人たちに対しても、自分自身が世の光でないといけないうのは当然だろうと思います。でも、5人の人たちよりも自分は立派かということ、よく分かりません。

自分自身がしっかり走らなければと考える結果、支障も出てきたと思います。どんな時も走り続けたいといけないう。とってもしんどい時も、悲しい時も走る。誰かに手を引いてもらったり抱っこしてもらいたくても、もう大人です

からそれも望めない。何とかまだ走れていても、まわりを見たらだれもいないし、知らない景色も広がっているということが今まで何度もあったのではないかと思います。そのうち、走るエネルギーがどうしても出なくて、「もう無理！」と思って止まってしまいます。

聖書には「光」という言葉がよく出てきます。正しい人の姿や行いが輝いて見えるからだと思いますが、私たちは自分の力で走っているから光のように輝くのでしょうか。月のように誰かの光を受けて、それで輝くというのでもいいのではないのでしょうか。自分は正しくはないし、力もないけど、わずかな光を放ちながら何とか走ってきたし、これからも多分走っていくだろう。神さまの光を受けて。

祈 り

主なる神様、いつも私たちをお支えくださりありがとうございます。私は正しい人間でもなく、力もなく、前に進むことができなくなることがあります。あなたの期待通りの生き方が難しい者です。でもこんな私だからこそあなたはみ子によっていつも支えようとしてくださっています。知らない間に私の手を引き、抱っこしてくださっているのかも知れません。これからも、あなたのお支えを受けながら、また、あなたの与えてくださる光をともし火として進むことができますように。主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

み言葉

「この日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村に向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩いて行かれた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。…… 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いています」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるために家に入られた。一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、祝福して裂き、二人にお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は互いに言った。「道々、聖書を説き明かしながら、お話しくださったとき、私たちの心は燃えていたではないか。」

(ルカ 24：13～16、28～32)

ルカによる福音書に、主イエスと弟子たちがエルサレムに向かって道を進んで行かれる出来事があります。(ルカ 9：57 以下) ある人が主イエスに、「あなたがお出でになる所なら、どこへでも従って参ります。」と言いました。

主イエスは言われました。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが人の子には枕する所もない。」主イエスの行かれる場所は、私たちの想像を絶する所なのでしょう。安心して眠ることのできない、目を開いて死と向き合わなければならないところなのでしょう。主イエスはわたしたちを救い上げるために、枕する所もない十字架の道を進み行かれます。

正直申します。「どこへでも従って参ります。」「どこまでもついて行きます」とお誓いしたいのですが、主イエスに従えない、共に歩めない私なのです。

しかし、主イエスはすべてをご存知です。主イエスが捕らえられる前、ペトロが、「主よ、ご一緒なら、牢であろうと死であろうと覚悟しております。」と言いました。主イエスは、「ペトロ、言うておくが、今日鶏が鳴くまでに、あなたは三度、私を知らないと言うだろう。」ペトロは、主イエスが捕らえられ、大祭司の家に連れていかれる後を遠くから追って中庭に入り、人々からあなたは主イエスの仲間だと問われると、3度主イエスを知らないと言ってしまいます。ここにペトロと共に私もおります。その時、主イエスは振り向いてペトロと私を見つめられました（ルカ 22：61）。主イエスの眼差しはどのようなものだったのでしょうか。私は、いつくしみに溢れた眼差しでペトロと私を見つめてくださったと思います。

主イエスは、私の意気地なさ、弱さをよくご存知です。主イエスは、そのような私と共に歩んで下さるのです。エマオ途上で、不安と絶望に心折れそうな二人の弟子と共に歩まれる主イエス。二人は同行者が主イエスと気づいていません。

目的の村に到着した時、同行者はなお先を進み行かれることを望んでおられましたが、無理に引き止めると、一緒に留まってくださるのです。主イエスは、私が気づかぬうちに、私と共に歩み、共にいてくださいます。ついて行けなくてもいいのです。主イエスが、この私と共に歩み、共にいてくださる恵みをしっかりと受け取るのです。神さまが共に歩いてくださるのです。そして、聖餐式の中で、裂かれたパンに主イエスを見るのです。

祈 り

神さま、あなたは私たちが、主イエスに従うことが出来ない弱さをもった者であることをよくご存じです。しかし、にもかかわらず、主イエスの方から私たちに近づき、共に歩んでくださる恵みを感謝致します。どうか、聖餐式で裂かれたパンの内に、主イエスのお姿を見ることが出来ますようにお助け下さい。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。 アーメン

み言葉

「イエスは立ち止まって、『あの人を呼んで来なさい』と言われた。」
(マルコ 10:49)

イエスさまに従う群衆は、イエスさまはエルサレムでダビデ王のような王様になると期待しています(10:37)。そうした神様の御心を誤解した群衆を従えて、イエスさまの目はエルサレムに向けられていました。

イエスさまがエリコの町を出ていこうとされた時、道端で物乞いをしていたバルティマイという盲人が野獣のように叫びます。「ダビデの子よ、私を憐れんでください」と。彼は、イエスという神の子と呼ばれる人が今、エルサレムに向かって進んでおられる。この方にお願ひすれば、病気も治り、盲人も目を開けてもらえた、という噂を聞いていたのです。そして、エルサレムに向かうのであれば、いつかこのエリコを通るはずだ、その時こそ見えるようにしていただくバルティマイは、じっと道端に座り続けていました。そして、いつもと違う雰囲気を感じたバルティマイは、何かと周りの人に尋ね、イエスさまだ、と教えられて叫び続けます。「私を憐れんでください」と。

しかし、人々は、新しい王様の入城の前を取るに足りないような盲人のことなど叱りつけて黙らせようとします。

その時、イエスさまは、バルティマイの叫びを聴き、立ち止まられます。いくら神様の御心を行うために進んでおられても、一人の盲人の叫びを聴いて、立ち止まられるイエスさま。バルティマイをお招きになると彼は「上着を脱ぎ捨て、躍り上がって」イエスさまのところに來ます。そして、イエスさまは「あなたの信仰があなたを救った」と言われて彼の願い通り、彼の目を開かれます。

バルティマイの見たものは、優しいイエス様のほほ笑みでしょうし、人々からは無価値だと見下されていてもイエスさまの目から見たら自分はかけがえのないほど大切な存在なのだ、というイエスさまの愛だったのです。そのことが分かって、バルティマイは十字架の道を進まれるイエスさまに従う弟子になったのです。

祈 り

私たちの叫びを聴いてくださる神さま、どうか私たちを励まして、バルティマイのように力強く祈ることが出来るようにしてください。そして、あなたからのお返事の中に、周りからは無価値と見られるような私たちですが、人生で一番大切なあなたから愛されていることを実感出来るようにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

み言葉

「主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、打ちひしがれている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」（ルカ 4：18～19）

イスラエルの人びとが記憶にとどめている救いの体験が二つあります。出エジプトとバビロン捕囚からの帰還です。そのことをよく表しているのはエレミヤ書 23 章です。

主イエス様はわたしたちの救い主としてこの世に來りましたが、ルカによる福音書ではそのことが強調されています。イエス様の宣教の最初はナザレの会堂でした。イエス様は冒頭のイザヤ書の言葉を読まれて「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言されました。

ルカは捕らわれている人を解放し、圧迫されている人を自由にする救い主としてイエス様を描いています。「解放する」、「自由にする」という言葉は「アフェシス」と言うギリシア語で、「赦す」という意味もあります。わたしたち

を束縛から解放し自由にしてくださるためにイエス様は十字架にその命を献げられました。その十字架を仰ぎ見つつ信仰の道を歩み続けたいものです。

祈 り

主なる神様、あなたの御名を賛美いたします。あなたはわたしたちの罪を赦し、交わりを回復させえるために御子をこの世に遣わしてくださいました。わたしたちがその恵みに深く感謝し、自由と解放の福音を宣べ伝えていくことができますように聖霊によって励まし導いてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン



み言葉

こういうわけで、私はあなたに注意したいのです。私が手を置いたことによってあなたに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせなさい。神が私たちに与えてくださったのは、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮の霊だからです。ですから、私たちの主を証しすることや、私が主の囚人であることを恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のために、苦しみを共にしてください。

(Ⅱテモテ 1:6～8)

パウロはローマの獄中からテモテに手紙を書きました。第2回伝道旅行の途中テモテを弟子とし、周囲の目を恐れ割礼を施し同行させました。でもその後、パウロは信仰による義認を説き、その教えを恥じるなと言いました。信仰義認の教えにより、十字架の死は罪の赦しの象徴となり、どんな罪人の罪も赦される神の愛を教会の柱として、福音は伝えられてきました。

エルサレムではまだ律法学者、ファリサイ派、祭司長らの影響が強かった時代です。律法主義的な人、血筋や血統を重んじる人、復活のイエスを魔法使いのように語る人もいたと思います。礼拝堂や会堂もなく、家の教会です。ニケヤ信経も使徒信条もなく、異なる教えや作り話が教会の内外にありました。パウロはテモテに伝え聞いたことを忠実に教え行うように命じました。

私たちには聖書があり、入信時には教会とは何か、三位一体、復活、キリストの十字架と罪の赦し、聖餐、洗礼などについて学びます。そのことで、正しい教えと誤った考えの判断ができます。しかし初代教会時代には、神学も教理もまだ定まっていません。私の考えや教えは正しいと主張することは、とても勇気のいることでした。迫害や困難に立ち向かいながら、教会の信仰は整えられて、形づくられてきました。

今日も同じです。人生に対する正しい答えは誰も持ち合わせはありません。誰もが自分は正しい道を歩みたいと願いながら人生を歩んでいると思います。私たちには、聖書とみ言葉の道標、キリストが歩み、弟子たちが歩み示された道があります。それは平坦で、楽な人生ではありません。ただ神さまが共におられるという信頼の中で、先駆者たちは困難の道を歩み続けられました。人生に答えはありません。結果を知るのは神さまだけです。神さまの与えて下さった力と思慮分別の霊を信じ、自分を信じて歩むだけです。それこそ、神さまの祝福ではないでしょうか。

祈　り

恵み深い父なる神さま、あなたはどのように歩んで良いのか分からない私たちの人生の同伴者として、聖霊を送られました。聖霊は、私たちの心の奥底に潜み、私のために日々祈り、支えておられます。主よ、どうか、私たちが臆することなく、主の愛を大胆に証しする者となれますように、あなたの愛するみ子イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン

み言葉

あなたは知らないのか
聞いたことはないのか。
主は永遠の神
地の果てまで創造された方。
疲れることなく、弱ることなく
その英知は究め難い。
疲れた者に力を与え
勢いのない者に強さを加えられる。
若者も疲れ、弱り、若い男もつまずき倒れる。
しかし、主を待ち望む者は新たな力を得
鷲のように翼を広げて舞い上がる。
走っても弱ることがなく
歩いても疲れることはない。 (イザヤ 40:28-30)

「力を与える」とは英語のエンパワーメント (empowerment) の訳です。エンパワーメントとは、立場を弱くされている人が本来持っている力を取り戻し、自分の力を十分に発揮し、自分の人生の選択を決定していく環境が整えられていくことです。この概念は、1950年代から60年代にアメリカで起こった公民権運動で提唱され、1980年代の女性の権利獲得運動を経て広がりました。

この言葉の背景には、他者からの否定的な評価や差別・抑圧、暴力などによって、その人が自分の力を失ってしまっているという過酷な状況があります。その人が本来持っている力とは、その人のアイデンティティに関する重大な芯であり、神から与えられたいのちそのものです。そのため、

その力を奪われた人は、生きていく気力や自信を失い、自分を大切な存在だと思えないほどに追い詰められます。

その人が本来持っている力を取り戻していくには、社会のマジョリティがこれまで実施していた方法とは異なった、全く別の仕方によって課題に向かっていく経験と安心安全な環境が必要です。それには他者からの暖かく、揺るぎない支援と関係が求められます。そこには「疲れた者に力を与え、勢いのない者に強さを加えられる」神が働いてくださっています。そしていのちの尊厳が取り戻されたとき、いのちはそれぞれ多彩に輝きはじめます。

教会は、その支援や関係の構築の方法を新たに学ばなければなりません。構造的な力関係がある中で長年存在し続けてきた故です。そして神に立ち返り、神が日々世界の隅々で行っておられるエンパワーメントの働きの方法に学び、参与していく信仰共同体でありたいと心から祈ります。

祈 り

一人ひとりにいのちを与え、地の果てまで創造のみ業を繰り広げられておられる神よ、あなたが造られたいのちすべてに生きる力を与えてくださったことを感謝します。差別や抑圧のためにそのいのちの力を奪われている人々に目を留めてください。そして力を失っている人、痛みや悲しみに打ちひしがれている人にあなたの励ましを与え、翼を広げて舞い上がる鷲のように、生きる力を取り戻させてください。また神の子であるわたしたちを整え、果たすべき使命へと教会をお導きください。主イエス・キリストによってお願いいたします。 アーメン

み言葉

「イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす。』」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。』」（ヨハネ 20：21～22）

神様は闇に住む私たちのために、神の御子イエス様を世に遣わされて、私たちと同じ肉体をとらせられました。何故そうされたのですか？

神様、あなたは慈しみだからです。人間をこよなく愛されるからです。それが神様の人への思いです。「ハレルヤ主に感謝せよ。まことに、主は恵み深い。その慈しみはとこしえに。」（詩編 106：1）

神様は人に生きる力を与えるために、独り子の姿でいのちをお示しになりました。イエス様は、神様の思いを現すロゴス（言）です。人はイエス様のみ言葉や行いで、神様の思いを伝えられました。こうして人はイエス様から生きる力を頂くのです。

聖霊は誰からどこにくだるのでしょうか？ 神様と一つであるイエス様が「聖霊を受けなさい。」と命じておら

れます。「受けなさい」。霊と訳される Pneuma は「風、息、魂、心、命」です。風は思いのままに吹く（ヨハネ 3：8）ように、霊はイエス様から息を吹きかけられるようにして注がれます。

受けなさいとされる聖霊は、ご復活の命から吹きつけられるのですから、そこには神様の思い、慈しみ、恵みとイエス様の人を生かすいのちが満ちています。私たちは大きく深呼吸をして全身に聖霊を受け止めて生かされていくのです。

祈 り

愛と慈しみに富んでおられる神様、あなたはイエス・キリストをこの世にお遣わしになり、人を生かそうとされるお方です。私たちが日々の生活の中で光を失ったとしても、あなたは常に私たちを見つめ見守っておられます。どうか、私たちの心、魂の奥深くにあなたの息を吹き込み、生きる力と希望を与えて感謝と喜びをもってみ心に従い歩んで行くことができるようにしてください。憐れみ深い主よ、み子イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン

おわりに

2023 年 11 月の日本聖公会宣教協議会から、ここからまた歩きはじめよう～いのちに仕え、となりびととなるために～「神のみ声に耳を傾けよう」「人々の声に耳を傾けよう」「世界の声に耳を傾けよう」という 3 つの呼びかけがなされました。宣教協議会の主題は「いのち、尊厳限らないもの～となりびととなるために」、主題聖句は「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネ 15:5) でした。

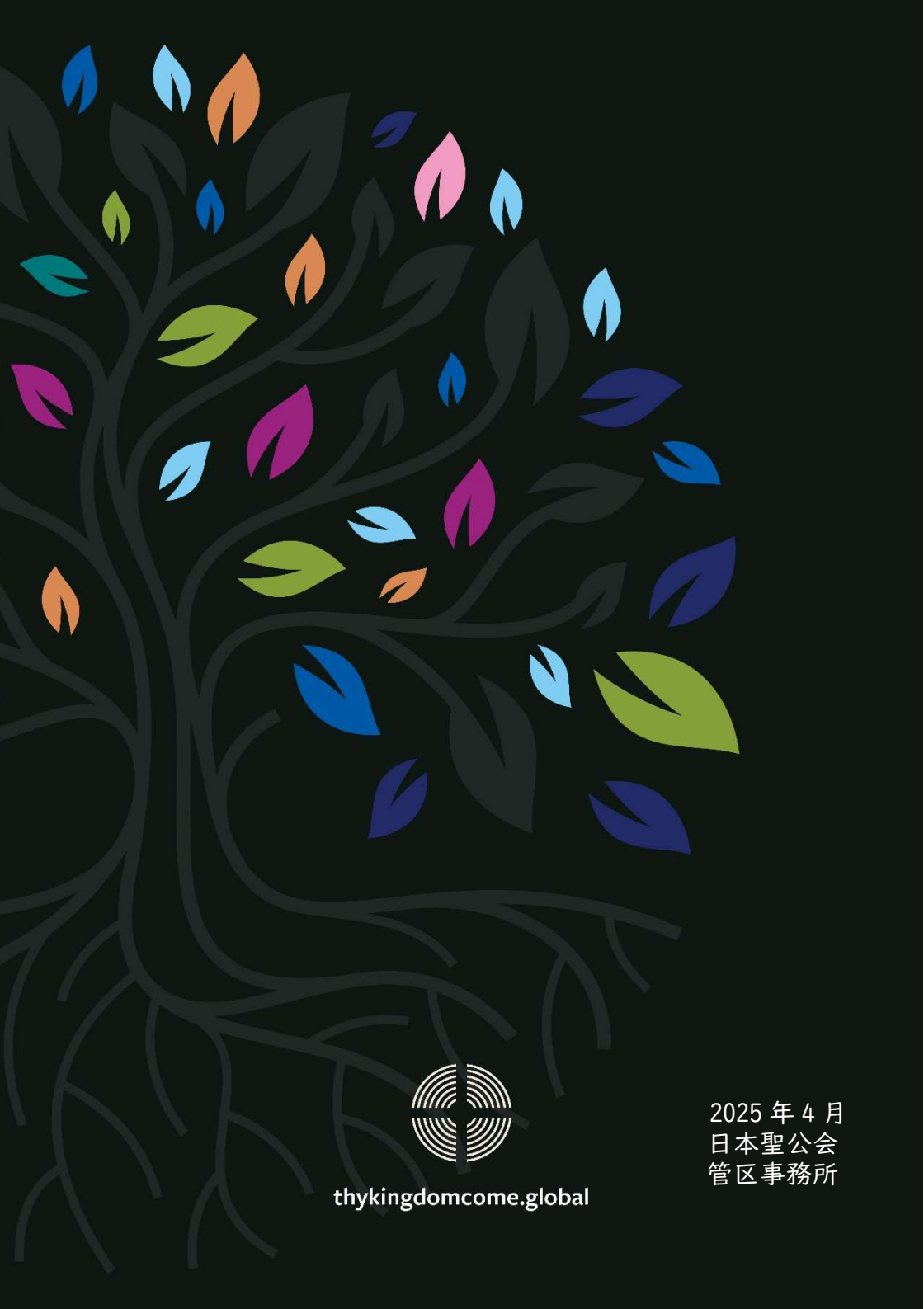
ことに「神のみ声に耳を傾けよう」では、小項目として「イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに?」「進むべき道を問い続ける…聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう」「変化を恐れない…宣教協働区、新しい祈祷書、生き生きとした「今」の礼拝!」という 3 つがあげられています。イエスさまの弟子として、時代の変化の中で聖書のみ言葉に聴き、祈ることによって、となりびとに仕え、すべてのいのちを大切にする私たちの信仰の道が整えられていきます。

「み国が来ますように」の目的は、5 名の方の導きを
祈ると共に、私たちがイエスさまとの交わりを深め、
イエスさまの証人として成長していくことです。繰り返し
この冊子を用いて祈ることに加え、祈祷書の「教会問答」
(改正祈祷書試用版も発行されています)を学び直すこと
も有効かもしれません。



※ 聖書は、『聖書 聖書協会共同訳』を使用しました。





thykingdomcome.global

2025 年 4 月
日本聖公会
管区事務所